

著書で女性にエール フランス流「自分に正直に」

日仏芸術文化協会理事長 谷口恵津子さん

ダイバーシティ + フォローする

2021年8月14日 5:00 [有料会員限定]



保存



フランス人は、デート当日であっても気が乗らなければ平気でキャンセルをする。無理に行って楽しめないでいることのほうが、よっぽど失礼だから——。日仏芸術文化協会理事長を務める谷口恵津子さんは、5月に発行した著書「フランス人女性に学ぶ ストレスフリーの生き方」で、自分の気持ちに正直に生きることの大切さを説く。

夫の海外駐在に同行し、世界各地の生活や文化に触れた。1999年に日仏芸術文化協会を創設。音楽会や賞を企画するなど、フランスと日本の文化交流に力を注ぐ。

常に本音を語るフランス人とは対照的に「日本人は本音を隠し遠慮しがちな性格」と谷口さんはみる。特に女性は日常生活でも人生の選択においても、気持ちを押し殺したりやりたいことを制限されたりすることが多い。知り合いの日本人女性らから聞いた「仕事を続けたかったが、育児などで諦めざるを得なかった」という一言が、執筆のきっかけだったと語る。



楓書店・1430円=税込み

世界経済フォーラムが各国の男女平等度を順位づけした「ジェンダー・ギャップ指数2021」でも、日本は156カ国中で120位と先進国のなかでも最低レベルだった。少子化にも歯止めがかからない。「女性を取り巻く現在の日本の環境に危機感を感じる」という。

一方で同指数16位のフランスは、先進国の中でも高い出生率を誇る。産休・育休後にも女性が仕事に戻りやすい職場づくりが行き届き、大学までの学費が無料となるなど「国全体で子供を育てる」仕組みがある。しかし現在のフランスの環境は、学生運動に端を発し、大衆が古い秩序に異を唱えた1968年の五月革命以来、女性たちが声を上げ続けてきたことで得たものだ。



フランスの女性たちのように大きなムーブメントを起こすには、日常で本音を言えるような小さな意識の変化が必要だ。参考にしやすいライフスタイルの紹介をすることで「自分の気持ちに正直になるための後押しができれば」と期待する。

谷口恵津子さん

谷口さんが訴えるのは「意思決定の大切さ」だ。フランス人は

誘われて行ったコンサートが面白くなくても、誘ってくれた人のせいにはしない。行くといった自分自身の責任だからだ。「Si tu veux（もしあなたがそうしたいならば）」という言葉はフランス人はよく使う。「人生の主役はあなたであり、あなたの歩む道はあなた自身が決めなければいけない」ということを表す、と谷口さん。日本の女性にも意思を持つことの重要性を説く。

「周囲がピンクだといっても、自分がブルーだと思うならそれはブルー。自分の感じたことに自信をもって」と女性たちにエールを送る。

（黒沢亜美）

